

Title	有意性理論における「記述」と「解釈」 : 言語的コミュニケーションの非言語的側面
Author(s)	能川, 元一
Citation	年報人間科学. 1994, 15, p. 53-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4985
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

有意性理論における「記述」と「解釈

――言語的コミュニケーションの非言語的側面 -

安旨〉

るとは言い難い。

るとは言い難い。

るとは言い難い。

の発言解釈を、一種の推論処理としてモデル化した。有意性(関連性)理の発言解釈を、一種の推論処理としてモデル化した。有意性(関連性)理になる。さらに有意性理論は、非言語的コミュニケーションをもカヴァーになる。さらに有意性理論は、非言語的コミュニケーションをもカヴァーになる。さらに有意性理論は、非言語的コミュニケーションをもカヴァーになる。さらに有意性理論は、非言語的コミュニケーションにおける聞き手、スペルベルとウィルソンは、言語的コミュニケーションにおける聞き手、スペルベルとウィルソンは、言語的コミュニケーションにおける聞き手

との間の、命題形式の類似に基づいた表現である。したがって、言語の記とした。だが解釈的表現は、発言と何か別の表現(思考や他の発言を含む)によってアイロニーをはじめとするさまざまな言語現象にメスを入れようによってアイロニーをはじめとするさまざまな言語現象にメスを入れようい。の事例においてすら生じうるものである。有意性理論は言語の「記ションの事例においてすら生じうるものである。有意性理論は言語の「記ションの事例においてすら生じうるものである。したがって、言語の記言を含む、

とりくむ必要があろう。というでは、有意性という概念を基礎として積極的にとその解釈プロセスとの解明に、有意性という概念を基礎として積極的に見にみあった理論へとしあげてゆくためには、非言語的な記号のはたらき現へと変換され、解釈されるはずである。有意性理論をスペルベルらの自述的な使用とは異なり、言語的コード解読とは別のメカニズムで概念的表述的な使用とは異なり、言語的コード解読とは別のメカニズムで概念的表述的

能川

元

キーワード

有意性、関連性、コミュニケーション、解釈、記号

1. 非言語的コミュニケーションの問題性

認知の理論として有意性理論がどのような有効性をもつか、を明ら てゆくうえでいくらかの示唆をもつ、という彼らの自負も、こうし 学で言うところの中央思考処理 central thought process を解明し 現実性のあるモデルを作り上げようとしている。彼らがグライスか つつ、有意性理論の射程と限界とを論じてみたい。 ィルソンが研究対象としてきたコミュニケーション現象に的を絞り かにすることである。だが本稿ではまず、これまでスペルベルとウ た可能性に基づいているのだろう。我々の最終的な目標は、まさに を捉える、という可能性を与えたと言える。有意性理論は、認知科 認知というより一般的な営みのある側面としてコミュニケーション に、単にさまざまな言語現象への整合的な説明を与えるだけでなく、 種の推論処理である、という洞察であった。この洞察は有意性理論 ら受け継いだのは、発言解釈が単なるコード解読処理ではなく、一 に継承し、発言解釈プロセスについてのより明示的で、心理学的に てまとめている。彼らはグライスの意味理論の基本的発想を発展的 を進め、その成果を有意性(関連性)理論 relevance theory とし ソンは、一九七〇年代の後半から共同でコミュニケーションの研究 フランスの文化人類学者スペルベルとイギリスの言語学者ウィル

さて、有意性理論は人間のコミュニケーション(直示・推論的コ

もつのかを、考察してみよう。 れがスペルベルとウィルソンの理論構成にとってどのような意味を ションについてはインフォーマルな取扱いしかしていないこと、こ コミュニケーションを題材としていること、非言語的コミュニケー かが、無視できない問題となる。以下では、彼らがもっぱら言語的 論じようとするなら、こうした制限がいったい何を意味しているの られている。有意性理論が認知についての理論としてもつ可能性を 言及してはいるが、解釈プロセスを具体的に分析してゆく段になる たしかにスペルベルらはみぶりによるコミュニケーションの事例に と (Cf., RT., chap.3, 4)、その対象は言語的コミュニケーションに限 あくまでテクストの断片の解釈を問題にしているにすぎない。また、 る。文学的テクストから例をひいてもいるが (RT., p.241)、それは て行われるような言語的コミュニケーションの事例がほとんどであ れまで彼らが実際に分析の対象としてきたのは、日常的対話におい づけられる)についての一般理論としてもくろまれている。だがこ ミュニケーション ostensive-inferential communication として特徴

言語的コミュニケーションとの区別は、さほど意味をもたないのだめつで、また、の意味論的な特性のゆえに選ばれているような場合 (RT., p.178)、の意味論的な特性のゆえに選ばれているような場合 (RT., p.178)、有意性理論によれば、言語的コミュニケーションとは発言が、そ有意性理論によれば、言語的コミュニケーションとは発言が、そ

チの利点を明確にすることが、彼らの当面の目的だったのだ、と考意性理論の枠組みによって分析し直すことにより、彼らのアプローあるように思われる。また、従来の語用論が扱ってきた諸現象を有めるように思われる。また、従来の語用論が扱ってきた諸現象を有めるように思われる。また、従来の語用論が扱ってきた諸現象を有めるように思われる。また、従来の語用論が扱ってきた諸現象を量と考えられるかもしれない。ではスペルベルらが非言語的コミュニと考えられるかもしれない。ではスペルベルらが非言語的コミュニ

えることもできる。

すれば、先に指摘した分析対象の限定は単に量的なものではなく、だが、分析対象を言語的コミュニケーションにおいて用いられている場合には、発言ないし直示刺戟 ostensive stimulus を解釈するプロセスの中核が、推論処理であると主張する。したがって、聞き手が処理する情報の心的表現は、推論処理しうる形式、スペルベルらの表現を情りれば「概念的」な形式をとらねばならない。言語的なコミュニケーションの場合には、コード解読処理によって「論理形式」が発言に割り当てられる。スペルベルらのいう論理形式とは、「概念的言に割り当てられる。スペルベルらのいう論理形式とは、「概念的言に割り当てられる。スペルベルらのいう論理形式とは、「概念的言に割り当てられる。スペルベルらのいう論理形式とは、「概念的言に割り当てられる。スペルベルらのいう論理形式とは、「概念的言に割り当てられる。スペルベルらのいう論理形式とは、「概念的言に割り当てられる。スペルベルらのいう論理形式とは、「概念的言に割り当てられる。スペルベルらのいう論理形式とは、「概念的言に割り当てられる。とが表現へと変換される、という発想は決して概念的表現へと変換される、という発想は決して概念的表現が表の限定は単に量的なものではなく、だが、分析対象を言語的コミュニケーションへと絞ることには、だが、分析対象を言語的コミュニケーションへと絞ることには、

はらんでいる、とは考えられないだろうか。コミュニケーション理論としての有意性理論の内実に関わる問題を

2. 記号作用の多様性

有意性理論における「語用論」という語の用い方は、やや曖昧でる場合もあるが、同時に彼ら自身の研究を語用論として特徴づけてる場合もあるが、同時に彼ら自身の研究を語用論として特徴づけてもいる(RT., p.10, pp.178-9)。また、彼らの共同研究の最初期に属もいる(RT., p.10, pp.178-9)。また、彼らの共同研究の最初期に属ま直すことが提案されてはいるものの、語用論という用語までも廃棄しようとしているわけではない。そうしてみると、有意性理論は、RT., pp.9-10)。つまり有意性理論は、必ずしも発言解釈のプロセスを体をカヴァーするわけではなく、そこから言語的コード解読を除いた部分についてのモデルを構築しようとしているわけである(Cf., RT., pp.9-10)。つまり有意性理論は、必ずしも発言解釈のプロセスを体をカヴァーするわけではなく、そこから言語的コード解読を除いた部分についてのモデルを構築しようとしているわけである。実際、スペルベルとウィルソンがコード解読処理について語っている。とは非常に限られており、いわばコード解読処理について語っている。時点から、有意性理論の議論は始まっている。

たことは、それなりに理解できる選択であった、と評価すべきなの上、スペルベルとウィルソンが自らの研究を語用論の範囲に限定し余地もあるだろうが、一度にすべてを論じ尽くすことは望めない以意味論と語用論との分業、という発想の妥当性については議論の

かで取り扱われねばならない問題なのである。 立派に解釈の一部をなしているのであり、有意性理論の枠組みのな ない。だが、みぶりをある特定の論理形式へと変換するプロセスも 作をまねている』、といったかたちで概念的に表現しなければなら 論によれば、受け手は送り手のみぶりを〝送り手は車を運転する動 まねる、というものをあげている (RT., p.154)。この場合有意性理 めに抜け出したいということを伝えるために、車を運転する動作を ルらは非言語的コミュニケーションの事例として、パーティーを早 クスとして放置することになりかねないだろう。例えば、スペルベ ケーション行動が解釈されるプロセスの重要な部分をブラックボッ 理論のうちにはっきり位置づけておかなければ、非言語的コミュニ てきたとは言えない。したがって、非言語的記号の意味論を有意性 形式へと変換するようなメカニズムについて、十分な研究がなされ ろで、非言語的な記号に関しては、それを概念的な表現ないし論理 係に選ばれて用いられるようなコミュニケーション、である。とこ 用いられるか、あるいは言語的な発言がその意味論的特性とは無関 なわち、非言語的コミュニケーションとは、非言語的な記号のみが て、非言語的コミュニケーションを次のように定義しておこう。す 言語的コミュニケーションに対するスペルベルらの定義に呼応し として特徴づけることには、重大な問題があると思われる。ここで をもその射程におさめようとするなら、有意性理論を語用論の一種 だろうか。だが、有意性理論が非言語的コミュニケーションの事例

これに関連してスペルベルとウィルソンは、知覚のメカニズムが

ない。この点を明らかにするために、やや廻り道になるが、グッドける非言語的な記号が解釈されるプロセスの説明としては、十分でる、と主張している。だがこれだけでは、コミュニケーションにお与する」(RT., p.81)、すなわち感覚的刺戟を概念的表現へと変換す「感覚的刺戟に対して、その刺戟を概念的に同一指定したものを付

マン N. Goodman の記号理論を参照しておきたい。

グッドマンの記号理論の注目すべき点は、それが記号を媒体による指示のはたらき方による分類をも提案したところにある。指示には大別すると外延指示 denotation、および例示 examplification がは大別すると外延指示 denotation、および例示 examplification がは大別すると外延指示 denotation、および例示 examplification がは、複数の指示の輪を介してはたらく場合(ほのめかし allusionと呼ばれる)もあるので、ひとくくりに記号と呼ばれている。さらに記号には、多様な指示のはたらきがみられることになる。また、記号のは、複数の指示の輪を介してはたらく場合(ほのめかし allusionと呼ばれる)もあるので、ひとくくりに記号と呼ばれている。さらに記号には、多様な指示のはたらきがみられることになる。また、記号のは、複数の指示の輪を介してはたらく場合(ほのめかし allusionと呼ばれる)もあるので、ひとくくりに記号と呼ばれるもののうちには、多様な指示のはたらきがみられることになる。また、記号のは、複数の指示のはたらきがみられることになる。また、記号を構成すが含まれている。逆に言語的な記号も常に外延指示によってはたらくわけではなく、例示などによってはたらく場合もある。

作用である。ある対象がある特性をもち、さらにその対象がその特介しておこう。例示とは、ひとことで言えば見本、サンプルの記号例示という概念はグッドマンに独自なものであるから、簡単に紹

成せず、むしろその例示作用によって私がかぜをひいていることを 語られた私の発言が、その命題形式によってはまったく有意性を達 うした特性を例示していなければならない。さらに、しわがれ声で くの特性のうちしかるべきものに焦点があわせられ、私の発言がそ だろう。この発言が私の体調についての証拠となるためには、数多 ほどの私の発言は、さまざまな言語的、非言語的特性をもっている 事態、出来事、事物は証拠として解釈されねばならない。例えば先 は、それ自体でなにごとかの証拠であるわけではない。証拠となる 必ずしもそれらの想定を(…)コミュニケートせずに、提出する」 直接的な証拠を提出することは、コミュニケーションではない。と ころで、スペルベルとウィルソンによれば、伝えようとする情報の 接的な証拠を提出したのだ、ということができるかもしれない。と いるわけではない。むしろ私は、自分がかぜをひいていることの直 声で語られた発言は、私がかぜをひいているという事態を記述して わがれ声で話しかけたとしよう。私のしわがれ声、ないししわがれ がかぜをひいていることを対話者に伝えようとして、ことさらなし の布切れは「赤い」と「手触りがよい」という特性に関して見本と しよう。そしてその布切れがこれらの特性を指示しているなら、 る布切れが「赤い」「手触りがよい」といった特性をもっていると (RT., p.23) からである。だがなんらかの事態、出来事、事物など いうのも、「いかなる事態も、さまざまな想定の直接的な証拠を してはたらき、これらの特性を例示していることになる。また、私 性を指示する場合に、その対象はその特性を例示する。例えば、 あ そ

像できるのである。的コミュニケーションではないにせよ)、というケースは容易に想いコミュニケーションではないにせよ)、というケースは容易に想伝達する(スペルベルとウィルソンの定義によれば、たしかに言語

まるだろう。 う記号作用の肝心な部分は、すでに過ぎ去ってしまっている。同様 を例示している」とパラフレーズされたときには、すでに例示とい 前に決定されているわけではない。したがって、「記号Sは特性P 号作用を行うことになる。だがそれがどれであるかは、必ずしも事 らくには人間の解釈という営みが必要である。例えば「例示」の場 像はそれが指示するものに類似していることによって、見本はそれ のことは、言語による記述以外の多くの記号作用についてもあては 合、ある記号はそれがもつ無数の特性のうちのいくつかを通じて記 みによって記号作用を行うわけではなく、それらが記号としてはた る。だが見本にせよ画像にせよ、これらは決してその客観的特性の が例示するものの特性をわけもつことによって、それぞれ記号とな つある性質に宿っているわけではない。常識的な見解によれば、 描写(画像による外延指示)といった記号作用は、決して記号のも 合、そうした記号は受け手によって解釈されねばならない。例示や 以外のものであれ ―― がコミュニケーションに用いられている場 号 ―― その記号作用が外延指示であれ、例示であれ、あるいはそれ 繰り返し強調しておくなら、みぶりをはじめとする非言語的な記

概念的表現というかたちで心的処理をうける。非言語的な記号の伝さて、すでに述べたように、有意性理論によればあらゆる情報は

なるものだからである。

表現が正しいことを望み、受け手は自分に呈示された記号が正しいた那言語的な記号を解釈してゆくプロセスをも、そのモデルのうちに組み込んでゆかねばならない。グッドマンは、そうした記号の解釈過程について体系化されたモデルをう人間の営みの重要性を指摘した点にある、と言えよう。だがグッう人間の営みの重要性を指摘した点にある、と言えよう。だがグッ方人間の営みの重要性を指摘した点にある、と言えよう。だがグッ方人間の営みの重要性を指摘した点にある、と言えよう。だがグッ方人間の営みの重要性を指摘した点にある、と言えよう。だがグッ方人間の営みの重要性を指摘した点にある、と言えよう。だがグッカーとその解釈とを導く、いくつかの要因を数え上げているに組み込んでゆかねばならない。グッドマンの功績は、ともすればいまったが、これら諸要因は「正しさ rightness」という概念に統合される。記号の使用とその解釈とを導く、いくつかの要因を数え上げているに組み込んでゆかねばならない。グッドマンの功績は、ともすれば、人間というが表しているには、人間の対象を表している。

その解釈はより容易となるのだが、解釈の容易さは解釈に必要な処とウィルソンの「有意性」という概念と、グッドマンの「正しさ」という概念によっての適切さ」、「有益さ」、「啓発性」などと呼ばれている要因は、有意性理論の「文脈効果」という概念によってまためることができる。また「経験の守り entrenchment」は「処理とめることができる。また「経験の守り entrenchment」は「処理とめることができる。また「経験の守り entrenchment」は「処理が力」という概念によって捉え直すことができる。というのもグッドマンによれば、ある記号の使用が経験によって守られているなら、アベルベルことを期待する、と言ってよいだろう。もしそうなら、スベルベルことを期待する、と言ってよいだろう。もしそうなら、スペルベル

分類されているようなコミュニケーション行為においても、非言語のない。むしろ我々は、有意性理論において問題と示唆をもちうるように思われる。例えば表出や例示において問題とするよう、どの特性が指示されているのかを決定する、という仮定するよう、どの特性が指示されているのかを決定する、という仮定をたてることができるだろう。だが、非言語的記号を解釈するメカをたてることができるだろう。だが、非言語的記号を解釈するメカをたてることができるだろう。だが、非言語的記号を解釈するメカをたてることができるだろう。だが、非言語的記号を解釈するメカをたてることができるだろう。だが、非言語的記号を解釈するメカをたてることができるだろう。だが、非言語的記号を解釈すると、という仮定をたてることができるだろう。だが、非言語的コミュニケーションにらいまのところない。むしろ我々は、有意性理論においても、非言語といるのは、見かというない。

理労力が少ないことを意味するだろうからである。 ⁽³⁾

非言語的記号という問題は、議論の対象を言語的コミュニケーショ 明らかにしておきたい。これが次節の課題である。これによって、 述」と「解釈」との区別がもつ意味を明らかにしてみたい。 的な記号作用を考慮に入れねばならない場合がある、ということを ンに絞ったとしてもやはり回避できないことを示すと同時に、「記

3. 記述と解釈

あるいは過小評価されているという。例えば、次のような対話を考 ルらの指摘によれば、こうした可能性はしばしば見過ごされるか、 現象である以上、類似によってなにものかを表現しうる。スペルベ 表現していると考えることができる。ところで、言語的発言もまた 象が、それとなんらかの点で類似した現象を、その類似性によって されている。例えば犬を表現するために、犬の泣き声や格好を真似 用いられた発言の記号作用は、類似性に基づく表現の一種であると 現する。他方、解釈 interpretation としての発言、ないし解釈的に うな命題形式をもつ」(RT., p.227) ことによって、なにごとかを表 したり、犬の絵を用いるといった場合、直示として生み出された現 実の事態、あるいはなんらかの考えられる事態について真であるよ 具立ての一つが、発言の「記述的使用」と「解釈的使用」との区別 な使用とは、言語的発言に固有の記号作用であり、「なんらかの現 (RT., chap.4, sec.7) である。記述 description ないし発言の記述的 有意性理論が多様な言語現象を取り扱うことを可能にしている道

えてみよう (RT., pp.227-8)。

(A、Bはフランスを旅行中、宿でトラブルにあった。)

(一)(ア)A:宿の主人 inn-keeper には何語で話したの?

B:ボンジュール、コマンタレヴ、ビャン、メルシー、

Hか? (Bonjour, comment allez-vous, bien merci,

et vous?)

(イ) A:で、宿の主人はなんて言ってた?

m : Je l'ai cherche partout!

(ウ) B: くまなく探しましたよ。

(エ) B:自分はくまなく探した、と言ったわ。

の類似性に基づいて行う表現、さらには非言語的な記号が類似性に るなど)、によって測られる。これに対して、発言が命題形式以外 れほどの論理的特性を共有するか(例えば、同じ文脈含意を共有す 釈と呼んでいる。この場合、命題形式どうしの類似性は、両者がど 言のように、命題形式の類似性に基づくものを、スペルベルらは解 が類似性に基づいて行う表現のうち、(一イーエ) におけるBの発 似している。(一ウ)は翻訳の例であり、同じ意味論的構造をもつ の例であって、同じ命題形式をもつという点で類似している。発言 点で類似し、(一エ)のうち「と言ったわ」を除く部分は間接引用 用)は、同じ文の別のトークンであるという点で、もとの発言に類 人の発言に類似している。また(一イ)におけるBの発言(直接引 (一ア) におけるBの発言は、フランス語であるという点で宿の主

基づいて行う表現に対しては、スペルベルらは決まった術語を用意

スリーディングではあるのだが)。たい(ただし、前節での議論をふまえるなら、この命名はかなりミず"類似による表現"を一般的な名称として採用しておくことにし的な無関心を反映している、とも考えられよう。そこで、とりあえしていない。これは、非言語的コミュニケーションへの彼らの意図していない。

を が得意としてきた言語使用のケースをも、推論理論的なコミュニが得意としてきた言語使用のケースをも、推論理論的なコミュニが得意としてきた言語使用のケースをも、推論理論的なコミュニが得意としてきた言語使用のケースをも、推論理論的なコミュニが得意としてきた言語使用のケースをも、推論理論的なコミュニが得意としてきた言語使用のケースをも、推論理論的なコミュニが得意としてきた言語使用のケースをも、推論理論的なコミュニが得意としてきた言語使用のケースをも、推論理論的なコミュニを可能にした。

釈する話者の思考は他の誰か — これは特定の人物の場合もあれるいとの点を簡単に整理しておこう。まずスペルベルらによれば、発言が解れる話者の思想の字義的でない解釈として分析できる。次に話者の思想は、話が大まかな話し方の可能性は、ここに存する。すなわち両者は、話が大まかな話し方の可能性は、ここに存する。すなわち両者は、話が大まかな話し方の可能性は、ここに存する。すなわち両者は、話が大まかな話し方の可能性は、ここに存する。すなわち両者は、話がなるの関係に基づく。さらに後論の都合上、アイロニーに対する分後者の関係に基づく。さらに後論の都合上、アイロニーに対する分がなんらかの事態(現実のであれ架空のであれ)を記述するか、あるいはさらによびである。言いはさらに基づく。さらに後論の都合上、アイロニーに対する分がなんらかの事態(現実のであれ来空のであれ)を記述するか、あるいはさらに表がである。言いはさいしている。

明白にする。これが単なる「話法 reported speech」と区別される響的」発言(RT., p.238)と呼んでいる。さらに、反響的発言のうを解釈することで有意性を達成する発言を、スペルベルらは特に「反を解釈することで有意性を達成する発言を、スペルベルらは特に「反は、不特定多数の場合もあるし、あるいは過去の自分であってもよば、不特定多数の場合もあるし、あるいは過去の自分であってもよ

思想、表現を解釈する、と述べることもできよう。を除けば、便宜上発言がなんらかの自体を記述したり、なんらかのある。もっとも、発言と話者の思考との関係が特に問題となる場合の表現の解釈であったりするのは、話者の思想を媒介してのことでこのように、発言そのものがなにごとかを記述したり、なんらか

限りでの、アイロニーの特徴である。

4. 非言語的な記号作用としての解釈

られよう。また、(一イーエ)におけるBの発言のような引用や翻号作用は、グッドマンの言う外延指示 denotation として特徴づけいるように思われる。みぶりや画像による表現の多くは、有意性理いるように思われる。みぶりや画像による表現の多くは、有意性理いるように思われる。みぶりや画像による表現の多くは、有意性理いるように思われる。みぶりや画像による表現の多くは、有意性理なるように思われる。みぶりや画像による表現の多くは、有意性理なるように思われる。まず有意性理論の概念は、やや不満を感じさせる点を残している。まず有意性理論の解釈的使用、より一般的に言えば類似による表現、という発言の解釈的使用、より一般的に言えば類似による表現、という

用の記号作用について、立ち入った議論を展開する準備は整っていないのだが、引用が単なる外延指示から区別される、という点だけないのだが、引用が単なる外延指示から区別される、という点だけは指摘しておこう。さらに、(一ア) におけるBの発言は、直接にはなにも外延指示していない。この発言はフランス語のサンプルとはなにも外延指示していない。この発言はフランス語のサンプルとはなにも外延指示していない。この発言はフランス語のサンプルとはなにも外延指示していない。この発言はフランス語のサンプルとはなにも外延指示していない。この発言はフランス語のサンプルとなっており、それゆえフランス語であるという特性を、あるいは「フランス語」というラベルを指示する。そしてこのラベルが、宿の主持し込めてしまうべきではなく、むしろ例示を外延指示などからは押し込めてしまうべきではなく、むしろ例示を外延指示などからは押し込めてしまうべきではなく、むしろ例示を外延指示などからは押し込めてしまうべきではなく、むしろ例示を外延指示などからは押し込めてしまうべきではなく、むしろ例示を外延指示などからは、2000で、これでは、RT., p.178)、英語の早口言葉が用いられているので、これ文では(RT., p.178)、英語の早口言葉が用いられているので、これ文では(RT., p.178)、英語の中に表示を表示とは、2000で、これの記録といる。

(二) A:吃音の矯正はうまくいったの?

B:坊主が上手に屛風に坊主の絵を描いた。

していなければならないのである。していなければならないのであるとか、「滞りない」といった特性を例示おけるBの発言と(二)におけるBの発言との間にある類似性は、おけるBの発言と(二)におけるBの発言との間にある類似性は、おけるBの発言が「流暢な」であるとか、「滞りない」といったことの直は考えておらず、むしろこの発言は、矯正がうまくいったことの直えペルベルとウィルソンも、Bの発言がBの思想に類似していると

こうしてみると、類似による表現という分類は、そこに含まれるとまざまな表現の間の重要な差異を見えにくくし、さらにはコミュニケーションに用いられうる記号作用のいくつかを、見逃してしまっことになりかねないだろう。記述的表現の解釈においては言語的コードが同様の役割を果たすという想定は十分な説得力をもたない。その限りで、たしかに記述とそれ以外の表現との区別は重要である。だが記述以外の表現に関しても、たがいに異なる記号作用は、ある。だが記述以外の表現に関しても、たがいに異なる記号作用は、ある。だが記述以外の表現に関しても、たがいに異なる記号作用は、ある。だが記述以外の表現に関しても、たがいに異なる記号作用は、ある。だが記述以外の表現に関しても、たがいに異なる記号作用は、ある。だが記述以外の表現に関しても、それ以外の表現との区別は重要である。だが記述以外の表現に関してもくくし、さらにはコミュニケーション行動が利用する記号の多様性に留意しておくべきである。こうしてみると、類似による表現という分類は、そこに含まれることに対している。

の問いに対する答は否定的であることが、明らかになる。我々の提起した問いであった。次のような対話の分析によって、こという事情によって正当化できるのだろうか?これが2節の最後でという事情によって正当化できるのだろうか?これが2節の最後でという事情によって正当化できるのだろうか。これは、スペルう問題に対して、十分なとりくみを行っていない。これは、スペルすでに指摘したように、有意性理論は非言語的な記号の解釈といすでに指摘したように、有意性理論は非言語的な記号の解釈とい

う。

(三) A:かぜをひいてるんだって?

て休暇をとるよう勧めたりすることのない人物であり、そのことがの上司であり、しかも部下がかぜをひいているからといって、決しここで、Bは実際にはかぜをひいているとしよう。さらに、AはBB:(ことさらしわがれ声で)いいえ、元気ですよ。

的な記号とが協動しているような場合がある、という事実の証しと の発言はAに帰属させられた思想を反響しており、アイロニー でいし、両者の人間関係次第では冗談)の事例となる。もちろん、 の発言とAに帰属させられた思想との関係は、解釈のそれである。 でいらの定義によればこれも言語的コミュニケーションの事例である。だがさらに、Bの発言はかぜをひいた人間の声に特有の特性を をアイロニーとして適切に解釈するためには不可欠である。Bの発言は、言語的コミュニケーションにおいて、言語的コミュニケーションにある。 とも考えられる。そしてこうした例示を把握することが、Bの発言は、言語的コミュニケーションにおいて、言語的な記号と非言語 をアイロニーとして適切に解釈するためには不可欠である。Bの発言は、言語的コミュニケーションにおいて、言語的な記号と非言語 をアイロニーとして適切に解釈するためには不可欠である。Bの発言は、言語的コミュニケーションにおいて、言語的な記号とが協動しているような場合がある、という事実の証しと

ればならないのである。スペルベルとウィルソンは、この指示が同ればならないのである。スペルベルとウィルソンは、この指示が同いかにして理解されるのかについて、スペルベルらがほとんどなにいかにして理解されるのかについて、スペルベルらがほとんどなにいかにして理解されるのかについて、スペルベルらがほとんどなにいかにして理解されるのかについて、スペルベルらがほとんどなにいかにして理解されるのかについて、スペルベルらがほとんどなにいかにして理解されるのかについて、スペルベルらがほとんどなにいかにして理解されるのかについて、スペルベルらがほとんどなにいかにして理解されるのかについて、スペルベルらがほとんどなにいかにして理解されるのかについて、スペルベルらがほとんどなにいかにして理解されるのかについて、スペルベルらがほとんどなにいかにして理解されるのかについて、スペルベルらがほとんどなにいかにして理解されるのかについて、スペルベルらがほとんどなにいかにして理解されるのかについて、スペルベルらがほとんどなにいかにしていないではないではないのである。

認め、言語的コミュニケーションのさまざまな側面に新たな光をあものではない。言語という記号のはたらきとして記述以外のものを

ドによって解読されるのではない、ということになろう。

以上の議論は、決して記述と解釈との区別がもつ重要性を減ずる

なっているのである。

う点である。したがって、言語の記述的な使用のように、言語的コー らきそのものは言語的な記述の場合とまったく異なっている、とい な記号を用いてなされるものの、そこではたらいている記号のはた ではないのである。ここで注意すべきことは、解釈的表現は言語的 がAの思想の解釈的表現であるということは、決して所与の出発点 り(三)の対話におけるBの発言を理解するにあたって、その発言 用の一種である以上、やはり受け手による解釈を必要とする。つま してきたさまざまな記号作用と同じく、発言の解釈的使用も記号作 が、この課題はいかにして達成されるのであろうか。これまで言及 のかを、こうした数多くの候補から選定せねばならないわけである であればよいのである。聞き手Aは、Bの発言がなんの解釈である ことがなくてもよい。Bの発言が、いかにもAの言いそうなこと Bの発言に類似した発言を行ったり、類似した思想を心に浮かべた 似したものはすべて、原理的には解釈される表現の候補となりうる。 さらに言えば、Bの発言がアイロニーとなるためには、Aが実際に に口にした発言や、誰かが心に浮かべた思想のうち、この発言に類 ある」という概念的表現に類似した表現の解釈である。誰かが実際 定される過程について、あまりに無関心であるように思われる。 例えば、先の(三)の対話におけるBの発言は、「(Bは)元気で

62

は否み難い。 するなら、現時点までの有意性理論の成果に一定の限界があること るメカニズムの解明こそ、その課題である。こうした観点から評価 課題も明確にしておく必要があるはずだ。解釈的な表現が処理され 用の側面として認めるのであれば、それにともなって新たに生じる てた意義は大きい。だが解釈的な表現を、記述とは異なった言語使

現が処理されるメカニズムについての知見は、その他の非言語的な そは、有意性理論をその本来の構想にみあった、コミュニケーショ それとは異なっているという我々の考察をふまえるなら、解釈的表 機会に譲らざるをえない。だが、解釈的な表現の記号作用が記述の ンについての一般理論として仕上げてゆくうえでの鍵となろう。 大いに役立つはずである。こうした意味で解釈的表現という概念こ 記号がどのように処理され、解釈されるのかを明らかにするうえで、 進められると考えられる。より立ち入った議論は、残念ながら別の 的表現の処理も、「最適な有意性」(RT., p.158)を達成するように の解釈であることによって、有意性を達成する。したがって、解釈 のうちにあるはずである。解釈的な表現は、なにか別の概念的表現 この課題にとりくむための手がかりは、まさに有意性という概念

(1) 本稿の執筆中に、スペルベルとウィルソンの共著(Sperber and Wilson, 1986a) が『関連性理論』(スペルベル・ウィルソン、一九九 三)という表題で邦訳され、訳者の方々は relevance に「関連性」と

> 出の拙稿および、そこであげておいた参考文献を参照されたい。 語を付記しておくことにした。なお有意性理論の概要については、前 別の訳語を採用した場合がある。混乱を避けるため、必要に応じて原 た、有意性理論におけるテクニカル・タームについても、邦訳書とは いう訳語をあてておられる。だが本稿では、以前発表した拙稿(能川・ 一九九三)にあわせて、「有意性」という訳語を採用しておいた。ま

(3)発言解釈を、ごくインフォーマルに "話し手の言うことがわかる" らの引用に際して RT. という略号を用い、本文中にページ数を記す ことにする。

(2) (Sperber and Wilson, 1986a: 67) を参照。また以下では、同書か

standing」という名を与えているのである。したがって、 後者である、と規定した。だが(Sperber and Wilson, 1986a)にお sion」と「解釈 interpretation」とを区別し、コミュニケーション理 会に譲りたい。 において「解釈」「了解」「理解」という概念がどのように規定されて 式を備えた内的表現 —— 彼らはこれを「想定 assumption」と呼んで 可能な概念として用いているように思われる。その代わりに、論理形 論(当時彼らはまだ語用論、と称していたが)の研究対象となるのは 関して留意しておかねばならないことがある。スペルベルらは 認知的な営みの解明に資するところがあるだろう。ただし、この点に こと、として表現できるとすれば、有意性理論は特に「理解」という いるかについては、もう少し検討が必要であろう。だがこれは別の機 いる —— の分析的含意を導出する推論処理に、想定の「理解 under いては、こうした区別は姿を消し、「了解」と「解釈」とをほぼ交換 (Sperber and Wilson, 1981) において、発言の「了解 comprehen 有意性理論

(4)日常会話の場合のように、限られた時間でやりとりが行われるコミ ろうと予想される。スペルベルらは発言の有意性を、その発言の処理 ケーションの形態を考慮にいれなかった理由は、次のようなものであ ュニケーションに議論を限定し、文学作品の解釈といったコミュニ

明示的なモデル化がはるかに困難となるのである。 ・ならない。そのため、文学作品の解釈といったプロセスについては、処理労力を最小限に抑えるためにかなりの制約をこうむることになが、だとすれば利用可能な認知的資源の多くない短期の認知処理は、が、だとすれば利用可能な認知的資源の多くない短期の認知処理は、が、だとすれば利用可能な認知的資源の多くない短期の認知処理は、防効果とによって規定している。人間の認知メカニズムは情報処理に的効果とによって規定している。人間の認知メカニズムは情報処理にに要する認知的労力と、それを処理することによって達成される認知に要する認知的労力と、それを処理することによって達成される認知

- Cf., RT., p.73, p.81.(5) 言語的コード解読は、中央処理に対する入力処理であり、自然言語
- また、(Goodman, 1984: 55-71) にも簡潔な説明がみられる。(7) 記号理論に関するグッドマンの主著は、(Goodman, 1976) である。
- ただしここでは便宜上、特性の例示として語ってゆくことにする。がそのラベルを指示するなら、その対象はそのラベルを例示する、と。る対象がラベル(述語など)によって外延指示され、さらにその対象(8)グッドマン流の唯名論に忠実に定義するなら、次のようになる。あ
- 照。 (9)証拠の例示作用については、(Goodman and Elgin, 1991; 20)を参
- ることが必要十分条件である、といった見解である。また例示にとっては、サンプルと母集団との間である特性が共有され描写にとっては、それが外延指示する対象との類似が必要十分であり、(10) ここでいう客観主義的扱いとは、次のような見解を指す。すなわち、
- (12)正しさ、および次段落で言及する正しさの諸要因については、特に善あるように思われる。(Goodman and Elgin, 1991; 48)を参照。(1)むしろグッドマンは、そうした一般理論の可能性に対して懐疑的で

- (Goodman, 1976; chap.1-3)' (Goodman and Elgin, 1991; 14-19)
- はできないだろう。 とを、完全に同一のものとして扱うこととスペルベルらの「有意性」とを、完全に同一のものとして扱うことあえずの研究対象としている。したがって、グッドマンの「正しさ」あえずの研究対象としている。したがって、グッドマンの「正しさ」な、長期にわたる解釈のケースも含めて議論を行っている。これに対な、長期にわたる解釈のケースも含めて議論を行っている。これに対な、長期にわたる解釈のケースも含めて議論を行っている。これに対いていたしだっていたのが、
- 照。RT., pp.72-3.
- (15) つまり、発言は話者の思考の写しであるとは限らない、ということ じ語を用いる根拠であろう。 ではなく、むしろその解釈的な表現を自分の心的表現として構築する とウィルソンによれば、受け手の課題は送り手の思想を再生すること らな混乱を招くのではないか、という批判が予想される。スペルベル ある種の形態とに、「解釈」という同じ術語を用いることは、いたず していなくても発言を選択することができる。そして自らの発言によ 分の思考の『細部』、例えばそのさまざまな含意などを、完全に確定 きるかもしれない。もし発言が思考の解釈なのだとすれば、話者は自 ていた。発言と思考との関係を解釈のそれとして捉えることにより、 ようとするのである (RT., pp.230-231)。これが、「解釈」という同 のに対し、聞き手はその思考についての「解釈的想定」をつくりあげ ことである。つまり話者の発言が話者の思想の「解釈的表現」である れよう。なお、コミュニケーションにおける受け手の作業と、表現の って、自分の思想の隠れた含意に気づく、といったことは十分考えら メルロ=ポンティの指摘に有意性理論なりの裏づけを与えることがで 考の新たな側面が明らかになるという事態もある、としばしば指摘し leau-Ponty, 1945; 212) ではなく、表現されることによって話者の思 である。メルロ=ポンティは表現が単なる思考の「外被や衣服」(Mer

- (16) 以上の点については、(Sperber and Wilson, 1986a: chap.4, sec.7-10) を参照。
- 一九八七、六九-八○頁)を参考にした。 (17) この点については(Goodman, 1984; 58-59) および、(グッドマン、

土要参考文献

- Goodman, N. (1976), Languages of art, Hackett Publishing
- Goodman, N. (1984), Of Mind and other matters, Harvard University Press.
- すず書房。グッドマン(一九八七)、『世界制作の方法』、菅野盾樹・中村雅之訳、みがッドマン(一九八七)、『世界制作の方法』、菅野盾樹・中村雅之訳、み
- Goodman, N., and Elgin, C.Z. (1991), Reconceptions in Philosophy and other Arts and Sciences, Hackett Publishing.
 Grice, P. (1989), Studies in the way of words, Harvard University Press.
- 佐藤信夫(一九八一)、『レトリック認識』、講談社。
- Sperber, D., and Wilson, D. (1981), 'Pragmatics', *Cognition*, Vol.10, pp.281-286.
- Sperber, D., and Wilson, D. (1986a), Relevance: Communication and Cognition, Harvard University Press.
- Sperber, D., and Wilson, D. (1986b), 'Loose talk', Proceedings of the Aristotelian Society, NS LXXXVI, pp.153-71.
 内田聖二他訳、研究社出版。
- 『大阪大学人間科学部紀要』、第14巻。 菅野盾樹(一九八八)、「いつイメージか ―― 示しの意味論のために ―― 」

"Description" and "Interpretation" in relevance theory — non-verbal aspects of verbal communication —

Relevance theory (=RT), proposed by Sperber and Wilson, tries to construct an inferential model of utterance-interpretation in verbal communication. An utterance is, RT argues, transformed into a conceptual representation by linguistic decoding, and then processed inferentially. In the case of non-verbal communication, also, a communicative behavior (an ostension, as RT defines) must be transformed into an internal conceptual representation. It is not plausible, however, to postulate some decoding processes corresponding to the linguistic one. And RT cannnot be an comprehensive theory of communication in general, as long as it leaves unexplained how non-verbal symbols are interepted.

Our argument is that, even in some cases of verbal communication, utterance interpretation implies a sub-task of understanding non-verbal symbols. RT distinguishes "descriptive" and "interpretive" dimensions of language use. Any representation with a propositional form (e.g., an utterance) can represent some other propositional representation (someone's thought, another utterance, etc.) in virtue of a resemblance between the two propositional forms; in this case, RT defines, the first representation is an interpretation of the seconde. The point is that an interpretive representation functions quite differently from a descriptive one, and is not understood by linguistic decoding process. Rather, we want to suggest interpretive symbols are understood in a similar way that other non-verbal symbols are, and that the notion of relevance will play an important role in explaining their interpretation process. Therefore, a further study in interpretive utterances must shed new light on non-verbal symbols (hence on non-verbal communication), as well as serve to develop a more comprehensive model of verbal communication.

Key Words

relevance, communication, interpretation, symbol